



大阪歯科大学

歯科医学教育開発室教授

おう ほうれい
王 宝禮

大阪府生まれ。昭和61年、北海道医療大学歯学部卒業後、北海道大学歯学博士、北海道大学歯学部予防歯科学講座助手。平成4~6年、米国フロリダ大学歯学部口腔生物学講座研究員。帰国後、大阪歯科大学薬理学講座講師、助教授を経て、平成14年、松本歯科大学歯科薬理学・口腔内科教授、平成22年、大阪歯科大学教授に就任、現在に至る。現在、日本口腔内科学研究会会長、日本歯科東洋医学会理事、日本歯科人間ドック学会理事、日本禁煙科学会歯科部門会長など。

名療法 発見!

連載28

口の渴き、舌の痛み、味覚異常、口臭が改善! 【口腔漢方治療の最新情報】

歯科といえば、歯を削ったり、抜いたりするといった治療をまず思い浮かべます。しかし近年、歯科医院には、そうした外科的な治療だけでは対応できない、口の中のトラブルに悩まされている人の来院が増えています。

代表的なものは、唾液の分泌が減ってしまう「口腔乾燥症（ドライマウス）」や、味がわからなくなる味覚障害、舌痛症（舌の痛み）、口臭など。患者さんは、歯科のほかに内科や耳鼻咽喉科

などを受診するものの、原因がわからなかつたり、一般的な西洋薬が効かないかつたりして、行き場を失う人も多いそうです。

しかし、患者さん一人一人の体质や特徴を重視した漢方処方によつて、こうした悩みを改善できることがあると、医科歯科連携で漢方治療の意義を唱えているのが、大阪歯科大学の王宝禮教授。注目される「歯科の漢方治療」について伺いました。

歯周病は全身の健康状態に大きく関連する

——歯科治療に漢方が用いられるといふのは、なじみがないのですが、どのような場合に行われるのでしょうか？

王 まず、具体的な症例を紹介してみましょう。50代の女性・Aさんは、あるときから、舌の痛みと口の渴きに悩

[取材・文]
医療ジャーナリスト
やまとたろう
山本太郎

まさるようになりました。そこで、内科で受診し、痛み止めや抗うつ薬などを服用していたのです。

しかし、親の介護による心労も重なり、食事や会話もおぼつかなくなりました。心療内科など他の病院も受診しましたが、症状はいつこうに改善しなかつたといいます。その後、漢方治療を実践している歯科医院を、ホームページで見つけ、受診しました。

Aさんは当初、おかゆを飲み込むこともできず、歩けないほど弱っていたため、まず体力をつける漢方薬、補益気湯を1カ月服用しました。



舌の痛みが和らいた!

次に、口腔乾燥症を改善する白虎加人参湯を1カ月服用したところ、「口渴感と舌の痛みが和らぎ、食事がおいしくなった」と話しています。

また同時に、Aさんが以前から服用していた抗うつ薬などには、副作用として口の渴きがあるため、担当の医師と相談して、薬の量を減らしてもらいました。こうして、少しずつ症状が改善されていくのです。

——なるほど。症状が起こっているのは口の中でも、全身の健康状態と関連しているようなケースに有効だということでしょうか？

王 そのとおりです。口の中のトラブルというと、従来は歯科や口腔外科で扱われることが多く、主に外科的治療が中心に行われてきました。

ところが近年、口腔乾燥症や舌痛症、味覚障害などの口腔疾患（口の中の病気）を訴える患者さんが増えています。これらの疾患は、これまでの外科的なアプローチでは対応できないことが少なくありません。そもそも、虫

歯や歯周病治療では、歯の痛み止めや炎症を抑える薬を除けば、慢性疾患に内服薬を用いること自体がほとんどありません。長年、歯科医師は、「虫歯治療」という洪水に追われていたため、内科的なアプローチいうことに余裕がなかつたのかもしれません。

特に、前述のような口腔疾患は、いわば「口腔不定愁訴」であり、歯科や口腔外科から内科、耳鼻咽喉科など複数の診療科を回り、それでもよくならないと、心療内科や精神科を受診するよう勧められることが多いのです。患者さんの立場からすれば、「口の中がおかしいのに、なぜ精神科にかかるのかしら」と思われるでしょう。ですが、実際に、精神的なストレスが緩和されることによつて、これらの症状が改善されることもあります。

一方、歯周病は、歯の周囲だけの問題と考えられがちですが、実は全身の健康状態と大きく関連しています。歯周病の原因は、ブラーク（歯垢）に含まれる細菌ですが、症状が大きく



その人の体質に合った処方を見つける

進行するのは、疲労やストレスによって体の抵抗力が落ちたときです。さらに、歯周病菌の悪影響によって、糖尿病や心臓病、肺炎などの病気が起こりやすくなることもわかっています。

この歯周病に対して、「直接の原因である「ブラークを除去する」というのが、西洋医学的な考え方に基づいたアプローチです。もちろん、それが有効であることは間違ひありません。ですが、予後が悪い場合など、さらに症状を全身の問題としてとらえる漢方医学的アプローチを併用すれば、より多角的、総合的な治療が可能になります。

そこで、口腔に症状を及ぼす全身性の疾患を診断し、外科的なアプローチとは異なる方法で治療を行うものとして、「口腔内科」という分野が、近年確立されてきているのです。私は「口腔」を一つの臓器ととらえ、口腔疾患を全身の問題として扱い、検査、診断、投薬という治療体系の確立から、西洋医学と東洋医学を交えて「日本口腔内科学研究会」を設立しました。歯科医師と他の診療科の医師とが、連携して治療にあたることを訴えています。

——漢方には、どのような特徴があるのでしょうか？

王 西洋医学が万人に共通する病気の原因を見つけ、それを取り除く治療を考えた場合、漢方医学は、一人一人の体質や特徴を重視し、全身の調和を図ることに重点を置いた全人的医療だといえるでしょう。用いられる薬に関し

ても同様で、西洋薬が一つの症状や病気を直接的に治すのに対しても、さまざまな成分を含む漢方薬は、全身的な症状の改善に向いています。

漢方薬は、草根木皮などの植物、一部の動物と鉱物とを、決められた方法によって、一定の量ずつ組み合わせた薬物です。つまり、多くの成分が含まれていて、さまざまな効果が複合的に表れることが特徴です。

西洋薬は基本的に、一つの成分が一つの決まった作用を持つ、という考え方です。例えば、総合カゼ薬なら、この成分が熱を下げ、この成分がセキを止めるというように、症状ごとに单一の薬効成分が配合されています。

これに対して漢方薬は、その人ごとの体質に合った処方を見つけ、そこに含まれている多用な成分が相互的に作用することで、病気に対応するという考え方です。だから、同じ病気でも人によって処方が異なりますし、逆に、同じ処方で違う病気に対応できることもあります。

医科歯科連携で漢方薬をうまく併用する

—診断や治療はどのように行われるのですか？

王 漢方医学には、「証」という概念があります。本人が訴える症状（自覚症状）や、検査や診察によつてわかる状態（他覚的所見）に加え、体格や性格など、その人の個人的な特徴を総合的に判断して、証を決定し、薬を処方するのです。

具体的には、まず「四診」と呼ばれる四つの診断法で患者からの情報を集めます。次のようなものです。
望診（視覚的）：肉づき、骨格、顔色、

皮膚のツヤ、舌などを診る。

聞診（聴覚・嗅覚的）：声、体臭、口臭などを診る。

問診：患者の訴えを細かく聞き取り、症状に関する生きた言葉を引き出す。
切診（触診）：脈を取る。

四診によつて得られる情報を、次の3種類のパラメータ（項目）からとらえていきます。

【虚・実】

3種類のパラメータ（項目）からとらえていきます。

【陰・陽】

その人の体质的に、どんな生体反応が起こりやすいかを示すものです。

「陰」を「寒」、「陽」を「熱」と読み替えると、理解しやすいでしょう。寒とは、冷えや悪寒の起こりやすい状態であり、熱とは、のぼせや発熱の起こ

「実」で、弱まっているのが「虚」です。こういうと、「虚」が悪くて「実」がいいように思つかもしませんが、そうではなく、いずれもバランスを欠いた状態と考えます。

例えば、「虚」は胃腸が弱くて下痢をしやすい、「実」は胃腸の働きが強すぎて便秘しやすい、といった具合です。

りやすい状態です。

【気・血・水】

「氣」は、全身の機能を正常に保つ働きを持つエネルギーのようなものと考えられています。一般に、「氣」の異常は、精神神経系や体内的諸器官の失調など、心と体を結ぶ機能の異常を指します。

「血」は、血液や皮膚に潤いを与える

作用など、血液の持つ機能全般を指します。その異常は、体のこりや目の下のくま、女性では生理痛や生理不順などが代表的です。

「水」は、血液以外の体液や体内の水分と考えられます。その異常は、むくみやめまい、下痢などが代表的です。

——「証」の見立ては専門的で、簡単ではなさそうですが？

王 そうなのです。そこで私は、漢方の専門の医師や歯科医師、薬剤師達と、口腔漢方用の問診票や漢方処方箋の例を示した表を作り、診療に用いています。

例えば、口腔乾燥症の場合、比較的体力のある人なら白虎加人參湯、体力が中等度以下なら麥門冬湯など、患者のタイプをいくつかに分けて処方します（上図を参照）。

舌痛症は、舌を刺激する歯の詰め物を除去したり、口腔乾燥を改善したりした上で、最もよく用いるのは加味逍遙散です。その効果が薄ければ、体力に応じて、ほかの処方を試します。

味覚異常では、柴朴湯をよく処方します。

ここで、また具体的な症例を挙げて説明しましょう。

60代の男性・Bさんは口臭に悩んで来院されました。口臭は、歯周病など口腔内の問題が原因になっていることが多いのです。

Bさんの場合は、「口の中が酸っぱ

口腔漢方の代表的な処方例（体力別に分けた場合）

「口腔乾燥症」

比較的体力のある人：白虎加人參湯
体力中等度以下：麥門冬湯

体力が低下している人や比較的虚弱な人：桂枝加芍術附湯、八味地黃丸など

体力問わず：五苓散

「舌痛症」加味逍遙散（多くの人に最初に使う。効果が薄ければ以下の薬に変更）

体力問わず：立效散

体力中等度以下：半夏瀉心湯、柴朴湯

体力が低下している人や比較的虚弱な人：桂枝加芍術附湯、當帰芍藥散など

※人口唾液、鉄剤、ビタミン剤を必要に応じて使用

「味覚異常」柴朴湯（多くの人に最初に使う。効果が薄ければ以下の薬に変更）

比較的体力のある人：黃連解毒湯、白虎加人參湯など

体力中等度：小柴胡湯、半夏瀉心湯

体力中等度以下：半夏厚朴湯

体力が低下している人や比較的虚弱な人：柴胡桂枝乾姜湯、六君子湯など

「口臭」口臭の診断（口腔内疾患のあるもの、口腔内に原因がなく胃腸症状のあるもの）

※口腔乾燥症が原因の場合は、口腔乾燥症の処方へ

比較的体力のある人：黃連解毒湯 体力中等度以上：黃連湯

体力中等度：半夏瀉心湯 体力中等度以下：半夏厚朴湯

体力が低下している人や比較的虚弱な人：六君子湯

出典：王 宝雄、王 龍三 共著「今日からあなたも口腔漢方医」（医歯薬出版株式会社）より作成

い感じがする」という訴えがあり、内科医の診断により、逆流性食道炎（胃酸が食道に逆流し、胸焼けなどを引き起こす病気）があつて、それが口臭を引き起こす一因と考えられました。H2プロッカー（胃酸を抑える薬）などの薬も飲んでいたことがあつたといいます。

Bさんは、食欲不振や胃痛、全身の倦怠感などの訴えもあつたことから、体力が低下している虚証傾向と見立てて、内科医と相談して、六君子湯を処方しました。すると著効があり、胃腸の調子が改善して元気になるとともに、口臭も気にならなくなつたと喜んでいました。

——漢方治療を受ける上での注意点などはありますか？

王 まず、服用期間に関する注意です。漢方薬は、ときに劇的な即効性を示すこともあります。基本的に定期間にわたって続けて服用し、体質が改善されることによって効果が表れてくるものです。

また、「証」を見立てるということは、1回で終わりといった単純なものではなく、患者さんの状態を観察しながら、そのつど、処方を変えていく必要があります。

これはあくまで目安ですが、同一の処方を2週間～2ヶ月続けて効果が表れないようなら、ほかの処方を試すべ

きでしよう。

私はよく患者さんに、「6カ月間、つきあってください」とお話しします。もちろん、もつと早く改善効果が表れることがあります。2カ月以内を1クールとして、数種類の処方を試す期間という意味で、そう言っているのです。

これまで、私の所へ漢方治療を希望して来られる患者さんの多くは、すでにほかの病院や診療科でさまざまな治療を受けていて、「何をやっても治らない」という人が少なくありません。そういう患者さんに対して、素早く「治す」というより、全身的な「改善」を目指すという発想が大切だとお話し

しています。

また、先ほどのAさんのケースもそうでしたが、他科の治療薬の副作用が口腔疾患に関与していることもあります。この場合、医科歯科連携で漢方薬をうまく併用することで、他科の治療薬を減らしていくことがあります。

漢方薬は、西洋薬と比較して、薬同士の相互作用によって問題が生じることが少ないため、他科の治療薬と併用しやすいといえるでしょう。

ただし、ときおり誤解されていますが、漢方薬には副作用がないというわけではありません。漢方薬をサプリメントのようなものと考えて、気軽に飲むことは危険です。

くれぐれも、医師、歯科医師の専門家による処方を受けてください（口腔漢方に取り組む歯科医院は、日本口腔内科学研究会のホームページに掲載されています。ホームページのアドレスは欄外を参照）。

——漢方薬の飲み方の注意点は？

王 一般に漢方薬は、1日に2～3回に分け、食前（食事の30分前が目安）か食間の空腹時に服用します。万が一、食前に服用して胃腸障害が起った場合は、食後に服用してもいいとされます。

なお、現在、歯科で保険が適用される漢方薬は、口内炎や歯の痛みに使われる種類に限りがあるため、口腔漢方は保険外診療で行われることがありますので、必ずご確認ください。

があります。私は、煎じるタイプの漢方薬をお勧めしています。

確かにエキス粉末は煎じる手間がなく、気軽に服用できます。ですが、コーヒー豆をひいて入れたコーヒーと粉末のインスタントコーヒーでは味や香りが全然違うように、煎じ薬とエキス粉末も同じではありません。煎じ薬のほうが本来の形ですし、薬効成分が出やすく、効能効果に優れていると考えています。

また、漢方薬には、自然の生薬をじっくりと煮出して、そのまま服用する煎じ薬と、エキスを抽出した粉末と